

二〇一九年度文芸資料研究所シンポジウム「源氏物語、伝統と未来」

源氏物語の女房装束

—十二単をご覧くださいます—

井筒與兵衛

こんにちは。井筒與兵衛です。お坊さんや神職さんの衣裳を扱う商売をしていることで、古代の衣裳のことは、普通の人より勉強していると思っております。最初に、『源氏物語』が書かれた時代のことと、十二単じゅうにひらえとは何かという事についてお話したいと思います。それから『源氏物語』玉鬘巻にある歳暮の衣配りについて、玉鬘の衣裳を具現化したらこの様な姿になるかというものをご覧いただき、次に現代の十二単に着替えてもらって、その違いをご覧くださいと思います。

(一) 西暦一〇〇〇年頃の世界

『源氏物語』は西暦一〇〇〇年頃に書かれたとされる小説です。平安時代は七九四年に始まり一一九二年頃に終わりましたから、約四〇〇年という随分長い期間だという事を今から申しあげます。今は二〇一九年ですから四〇〇年前というと一六一九年、ちょうど江戸時代が始まったころにあたります。「花下遊楽図」で見られるような出雲阿国の衣裳から慶長小袖、宮本武蔵と戦った吉岡憲法の黒染めとか、月代を剃り、鬘を結って袴を着ていた時代、そんな江戸時代は二五〇年くら

い続きます。江戸時代でも黒褐色染めが広がったとか、一八〇〇年以降にベルリン藍が輸入されることによって、北斎の青い表現が実現できたなど、色を自由に使うのが困難な時代がありました。

葛飾北斎は青い空を描いた人です。つまり、それまで青を使っていなかったのに、プルシアンブルーといって、ベルリンで発見された藍色を作る技術が入ってきて、ベルリン藍、なまってペロ藍とも呼ばれます。陶器が好きな方はペロ藍という言葉をお聞きかもしれませんけれど、ペロ藍を使った青が使われるようになりました。ブルー、青色なんて簡単やと思われるかもしれませんが、青いんですけど、ペロ藍が発明される前は例えばラピスラズリとかの石を使うのですが、あれは精製が難しい。ブルーのラピスラズリの石を細かくして、ブルーのところだけ取り出す技術が難しく、なかなか作りにくいものです。今、アフガニスタンとチリで採れますが、チリのラピスラズリはアフガニスタンで採取されるものより色が美しくない。アフガニスタンは綺麗です

けど、戦争地帯とか、勝手に入れない危険な地域にあるので、なかなか手に入らなくなっています。私の会社で念珠として使っていますラピスラズリは後で着色しているものなので、とてもきれいなのですが、僕は嫌いです。嫌いなものを何で売っているのかという話です。なかなか制御できない、こんな中小企業でも制御しにくい問題なのかと思いますが、本物のラピスの念珠もいつかは非売りたいと思っています。色つけしたものは色つけしたものととして売りたいと思っています。

青と言えばさっき申し上げたラピスラズリがあるじゃないか、藍銅鉱もあるじゃないか、藍染の青もあるし、それを使えばいいだろうと思われるでしょうけれど、高価だったのと生産が難しかったために、普段に使用するのは困難でした。そういう感覚は、今を生きている私たちにはなかなか判らないところです。

江戸期の話。例えば歌舞伎の基になったということでご存知のように、出雲阿国という方がおられますが、

「花下遊楽図」を見はったことがあると思います。

ちよつと話が飛びますが今、「見はる」と京都弁を使いましたが、分かりますか？敬語と違うんですよ。天皇陛下のことを京都弁では天皇さんと言うんですね。うちの子どものことを人に話す時も「何々ちゃん」とか「何々さん」とも言うし、何にでも「さん」をつけるんです。飼っている犬が「ごはん食べてはる」とか言うんですね、自分の子供のことで「またミルク欲しがってはるねん」とか言います。天皇陛下に対しては天皇さん、「天皇さん、こんど京都に来はるんやで」という言い方をします。敬語なのか敬語でないのか分からない、なかなか便利な言葉なので、私は使いますが、教科書には載っていません。

閑話休題。あの精緻な染色技術も江戸期から進展して、やがて明治が始まります。明治維新は今から約一五〇年前に始まりました。当時、ガス燈が用いられたんですが、西暦一九〇〇年前後に電気による電燈が普及してきます。びっくりするでしょう。電気が普及

し始めたのは、たつた一〇〇年前のことだったんです。当時は電気を昼間つけるなんて、恐れ多いこと甚だしかったけれど、今では当たり前のようにつけています。それもこの一〇〇年前にやつと広がったものだということも覚えていただいたいと思います。

平安時代は、ローソクというイメージがあるかもしれないけど、ローソクは上等で高いものなので、ハレの日に使い、お寺さんでは御本尊に捧げる灯りとして、また貴族の家の一部で使われていました。貴族も普段は、例えば菜種油とか植物油を使って明かりとしていました。菜種油とかローソク、お仏壇が家にある方、おられます？一〇人ぐらいおられますか。その方は分かっておられると思いますけれど、ローソクに火をつけたら、煤だらけになりますよね。あれを菜種油に換えると、もつとひどいんですよ。煙の中にいるような感じ、鼻の頭なんか真っ黒になりそうなの、そんなものをずいぶん長い間使っていたということも驚きです。今と大きな違いなので、それも頭に入れてご覧いただいたら

いと思います。

明治維新から現在まで一五〇年、明治時代が始まるとガス燈が使われだしますが、第一次世界大戦（一九〇〇年）前後に、景気の上昇で電燈が一気に普及してきます。その後、太平洋戦争後も暫くは着物が普段着として着用されてきました。今、私たちは洋服を着ています。Tシャツを着ても着ています。こんな変化をする期間が四〇〇年という年月だという事です。平安時代というのはその様に長い期間だったという事を感じてください。

『源氏物語』が書かれた時代、ヨーロッパは中世と呼ばれる時代で、キリスト教の支配下にいろいろな地域がありました。国家という概念が出てくるのは一六世紀後半になってからで、それ以前は、いわゆるエリアとして、このあたりの地域、ここに住んでいる人たち、この山々は私たちのものだ、などと思っっているような人たちの時代でした。お坊さんとか貴族、地主とかは

いましたけれど、エリザベス女王が出てきて絶対王政みたいなのができるまでは、今の国家というような概念のものはありませんでした。それに代わるものとしてキリスト教のバチカン、カトリックの教皇がヨーロッパ全体を支配していて、例えば国会とか、国連の会議とかに対応するものとしては、教会が招集する会議が唯一ある時代でした。ニカイア公会議とか聞き覚えがあるのではないのでしょうか。

一〇〇〇年頃の東アジアは、北宋、契丹、吐蕃、西夏によって支配されており、既に唐の勢力は無くなっています。だから菅原道真が遣唐使廃止とか言うのは当たり前のことでした。北宋は開封を首都として勃興していました。科挙制度で選ばれた官僚に支えられた、皇帝による国家です。漢族という言葉もとても概念的なもので、人類学的に「これが漢族だ」といえる基準など僕はないと思っています。民族学や文化人類学など文科系の方からのアプローチで漢族が規定されると、

例えば言語や思想でそのように決められるのかもしれない。ませんけれど、人類学的に漢族、漢というのは概念だと思えます。北方の人たちが黄河の辺りを中原として、中華思想というのができたのが中国というのだと思えます。北宋はちよつと毛色が変わっている国で、長江以南の文化を多く取り入れたので、日本に入ってきた禅宗や浄土教は北宋の南エリアの影響を受けていると思えます。あと北部では契丹、西夏、吐蕃という国もありました。

そのなかの吐蕃、つまりチベットに関してですが、唐代の初期に一時期、周という国号に変わります。武則天（則天武后）が唐に代わって周という国をつくり上げて、彼女が亡くなると同時になくなつてしまつた国です。その後、七六三年にはチベットは長安まで侵攻しました。そのくらい当時のチベットは力が強くて、その後の元や清なども、国王はチベット仏教による名前も持つておられました。カトリック宗教であればカトリックの神しか信じないというところがありますけれど、

ど、中国では重層的に神と同時に仏を信じるということもありました。チベットの仏教の仏さんを信じていながら、儒教や道教も同時に行われていたのです。よく日本人はいろいろな宗教を一緒くたにしていると言われていますが、同じようなことは中国でも行われていたし、また、西洋におけるキリスト教信仰というのも土着信仰がベースになっているので、いろんな宗教の重層的な信心で成り立っているのは間違いないと思えます。宗派に属する人たちはあまりそういうことはありません。宗派に属する人たちはあまりそういうことはありません。

（二）十二単のこと

ご大礼の儀式をテレビでご覧になつた方も多々と思えますけれど、あの時に皇后陛下がお召しになつておられました衣裳のことを、「御五衣」^{おんごごい}「御唐衣」^{おんからぎぬ}「御裳」^{おんも}等と呼んでおります。それを見て僕たちは多分「十二単を着てはる」と思っています。テレビでも「十二単」とい

うテロップが流れていました。今日着ていただく衣裳も、十二単と想っていただけの衣裳です。でも、今日、着付けをするスタッフの女性は、今から着せるものを十二単とは認識していません。どう見ても十二単ですが、彼女らに言わせると「細長」と言うものだそうです。

これからまず「細長」と言われる衣裳を着ていただき、そのあとで現在の十二単を着ていただきます。どうしても、細長が御五衣、御唐衣、御裳になるかという点にご注意ください。こちらは『源氏物語』の登場人物の玉鬘が着ていたであろう衣裳を再現したものです。そして、最後にもう一度、細長に着替えてもらいます。それは明石の姫君が着ていただろうという衣裳を想定しています。これで一口に十二単といっても、実はこんな変遷、違い、多様性があるんだという点を見ていただくことになると思います。

『源氏物語』が書かれた時期は、それまで、奈良時代のような衣裳が日本的なものに変わってきた時代です。モデルさんは、今、臙脂色の着物を着ていますけれど、

公家女子細長（風俗博物館所蔵）



皇族女子盛装（風俗博物館所蔵）



本当はこんなのは着ないんです。裸の上に次に着ても
らうようなものを直に着た、という時代です。平安の
末ぐらいにやっと「小袖」というのができあがっていて、
中には白でなくて色付きだったり派手な小袖も生まれ
てきました。

「いつづきぬ五衣」も何枚という決まりもなく、中には二十枚
も重ねて着た人がいて、贅沢になつてはいかんどとい
うことを藤原道長さんは言っておられます。贅沢の極
みを極めたと思われる人が贅沢をするなど言つたそう
で、道長さんのイメージが少し変わりますね。

(三) お服あげ実演

それでは着付けをお願いします。うちのスタッフ
モデルさんの前と後ろについて衣裳を着せます。再現
というのは、今どんなものを着ておられるかとか、江
戸期はどんなものを着ておられたか、鎌倉初期に残っ
ている衣裳はどのようなものか、とかいう数点の現物
資料と文献によるヒントや一〇〇年後に描かれた絵巻

物等をもとに想像力を膨らませ、イメージして具現化
していきます。

今はモデルさんに立っていただいていますけれど、
平安時代は基本、座って生活をされています。座るの
も正座ではなくて韓国の人の座り方、つまり片足を立
てた座り方なので、当時の座り方できれいに座ろうと
すると、背筋、背中の筋力が必要となります。正座に
慣れていない人がこの座り方をすると背中が猫背のよう
に曲がってしまったって、なんか不細工です。あの座り方
をして背筋を伸ばす生活に慣れると、多分きれいな姿
勢を取ることができると思います。本職のモデルさん
でも片足を立てた座り方だと、割と不細工に座って、
正座をしている時のようにきれいに座れない。だから、
お行儀というよりも生活習慣が筋力をつけていって、
その姿にふさわしい格好良い、いい座り方をするよう
になるんだなあと思います。

さて、袴を着ていただきました。袴の紐の先に鼓のように見える糸綴し飾りがあります。これはこの時代には着ていないだろうと思いますが、井筒はこの立鼓かざりのない長袴は持っていますので、今はこれを着てもらっています。また小袖を着ておられますので、これも時代的に間違いだと覚えていただいたらいと思います。

今、お召しになっておられるのが肌着になります。「^{ひしえ}単」といいます。

僕は六六歳になりますが、私の小さい頃は、母親世代が電車の中で赤ちゃんに母乳を飲ませる光景は当たり前前のことでした。でも今は、胸を隠すケープをつけて赤ちゃんにミルクをあげています。



たった三〇年かそこらで人々の意識が変わる。意識が変わるのは早いですね。海外の地域でもそうなのでしょいか？みんなが、「恥ずかしい」と言うと、恥ずかしくなるのでしょうかね。これからもどんどん変わっていくと思います。

ここを見てもらったら分かるんですけど、仕立てと言っても糸は使っていないんですね。糊でくるくるつと捻って仕立てる。これも戦後まもなくは日本に残っていたと思うんですけど、「捻り仕立て」。もしくは捻りをした後に縫う「捻りぐけ」が併用されていると思います。今でも奈良の南都六宗と云われるような、法隆寺や東大寺とかのお坊さんの僧服はひねってくける、捻りぐけで仕立てた法衣を着ておられます。僕も注文が欲しくて作ってみたのですけれども、高くついて、採算が合わず、大変でした。大変だけどそれを引き受けてやってはる法衣屋さんがあるんですね。でも、継続させていくには値段が安すぎると思いました。おそら

く続かないと思います。普通の仕立てになっていくのだと思います。ともあれ、一〇〇〇年以前上前の仕立てが今のお坊さんの間で残っているということは、我々の会社でも十二単の再現ができるかもしれんということでもあります。

今、桂を五枚着せている途中です。「花橘かさねの襲」という色目かざねで着せています。

皇后陛下がご結婚された時、雅子妃殿下であった時代に、「花橘襲」といわれるこの色の組み合わせの五衣をお召しになっておられたので、真似して作った



ものです。花橘襲かさねというのはなかなか素敵で、三月の終わりから四月にかけて葉っぱが芽吹いてきて、五月間近になったら緑がこんなに濃い緑色になったという状態を表現して色が変わってきます。この後、白い花が咲くので白が次に出てきますし、その次には蜜柑の実をつけます。だから薄い緑色が濃い緑色になり、白い花が咲いてオレンジ色の蜜柑の実がなりますという、時の流れを襲の色で表した衣裳になります。



花橘かさね

今スタッフが紐を使って着せていますけれど、一枚着せては、次の一枚を着せた時に紐を抜き取りますので見てください。紐が何本も体に巻きつくのではないのです。

今、これ白い花の色ですね、白い花が咲きました。白い花の桂を着せた後、ちゃんと整えてきれいにのびし、紐を取る。ここで紐を結んで留めます。今、皆さんには衣裳の前を見てもらっているんですけど、後ろでどういうことがされているかと言いますと、このように身幅に綺麗に合うようにしています。僕がこの人の代わりに着せてもらったら布が足りませんけど、この人は細いので布が余ります。で、こういう風になります。そして中につけてる紐を取ります。丁寧に取り丁寧にたたむので時間がかかります。

以前、これを三分で着せたいと思ったんです。三分で着せて、一〇〇人の女性に、例えば一〇人のスタッフで、三分で一〇〇人に着せて、そういう格好をした人を

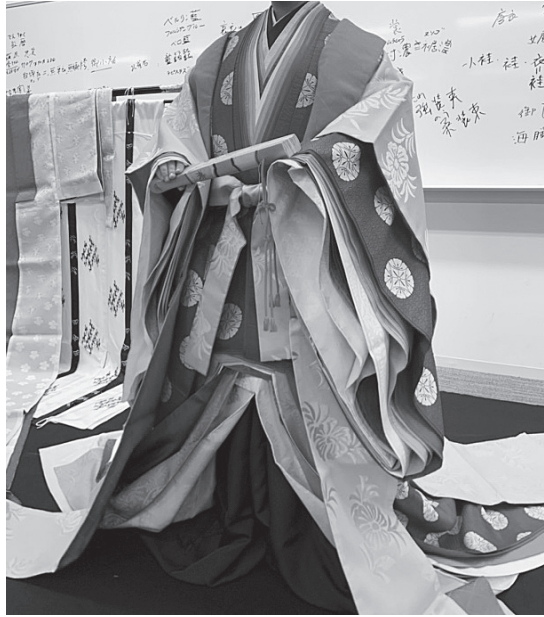
一〇〇人集めるというイベントを仁和寺で開催したところがあるんですが、皆さん、着ていく過程を楽しんでいます。そういう女心が私にはわからない。三分でさつさと着替えればよいと思うんですが、女の人は違うんですよね、一枚ずつ着ていく過程を楽しまれる。そういう意味では鏡も必要ですね。一枚ずつ変わっていくところを見たいのです。一枚ずつ変わっていくところを見ながら（本当は写真でも撮りながら）二〇分かけて着たかったのだろうというのが分ならず、三分でどんどん着せて…と思ったら時間がかかって大変でした。時間調整は間違えましたが、参加してくれはった一〇〇人の皆さんには喜んでいただきました。

今は時間があるので、ゆっくりどうぞ。変わっていく姿を見たいだろうなと思います。これで蜜柑が出てきました、これが襲の色ですね、淡い葉の色が濃くなつて花が咲いて蜜柑ができる。

緑というのも、本当かどうかわからないことが多い

ので仮説ですが、日本語で「緑の黒髪」と言うでしょう。なんで髪の毛が緑だと思えます？ 僕のような胡麻塩頭を、英語ではソルトアンドペーパーと言いますが、なかなかお洒落な言い方ですね。なんで緑の黒髪というのか不思議やと思いませんか。緑は色相としての緑色ではなくて、何もなかった茶色い木の幹から淡い緑色の何かが出てきてそれが葉っぱになる、だんだん大きくなって緑が濃くなる。生きていく感じ、生命力の躍動みたいなものを緑と表現したのではないだろうかという説があります。緑の黒髪というのはそういうことかなと思います。だから赤子の髪も緑の黒髪なんです。まだ生えていないけれど、これからイキイキと生えていこうという生命の営みが、緑という色であらわされていると思います。





この人は玉鬘さんなんですけど、玉鬘さんは光源氏が三五歳に、二一歳。満二〇歳ですけど数えて二一歳。源氏が三五歳の時に二一歳やった人が玉鬘で、モデルさんもちょうど玉鬘の年。

『源氏物語』のなかで裳着（成人式）を迎えた時の玉鬘

は二一歳という設定になっています。僕のイメージですと成人式はもつと若く、一五、六歳でもいい。でも玉鬘を二一歳に設定したというのは、二一歳でも十二分に若いという感覚があったのかもしれないなと思いました。一三、四歳はやっぱり子どもでもすもんね。花のある、盛りの年頃が設定されています。

玉鬘さんはどこにお住まいですかと言いますと、六条院という建物の西の対に住んでいます。光源氏の館（六条院）は二五二m四方の土地に建っています。面積にすると六万三五〇〇㎡、坪に直すと二万九二〇〇坪です。五〇階建てのタワーマンションが二五棟、一棟あたり八百戸として二万戸が建つ広さです。大きいですが、それでも今の京都御苑の十四分の一です。見方によればさほど大きくないですね。

そんな広いところを四区画に分けました。四町でできています。その区画の東北、東南、西南、西北、それぞれの町に、夏の御殿、春の御殿、秋の御殿、冬

の御殿と名前を付けはりました。それぞれの町の建物の構成は異なりますが、母屋があり対屋があります。東の対、西の対、北の対とそれを繋ぐ廊下があります。大きな源氏の屋敷のそれぞれの御殿は距離的に心理的にも離れたものになっていますし、西の対、東の対でも廊下があり、壺と呼ばれる庭もあり、心理的には距離のあるものとなっています。

それぞれの館には大きな庭があります。源氏の館の敷地のほとんどは庭になります。お住いされるところは割と小さいのです。そのような場所の夏の御殿には花散里、推定年齢三五歳。光源氏と同じ位の年だろうとされている女性が住んでおられて、玉鬘さんを育てておられます。一緒に夏の御殿に住んでおられます。一緒に住んでおられますけど一緒に住んでません。文章の中では西の対に住んでいます。この夏の御殿の中の西の対に住んでおられるということです。春の御殿には紫の上が、秋の御殿には秋好中宮が、冬の御殿には明石の御方が住んでおられました。

年末に光源氏が、それぞれに住んでいる女君たちに衣裳を配ろうということで、配っている場面に出てくるのがこういう衣裳です。この玉鬘さんが着ている衣裳について、『源氏物語』にどのように書かれているか、知っている人おられますか？ 僕も分からんのでちょっと読んでみます。訳した文章を読んでみますので聞いてください。

現代語訳の一例

年の暮れになって、玉鬘の調度や女房たちの装束など、高貴な方々と同列にと思って、「こんなに美しくとも、どこか田舎びたところが」と、山里育ちを懸念して新調した衣裳をさし上げたついでに、織物どもの、われもわれもと人びとが工夫を凝らして織った細長や小桂がさまざまにたくさんなのをご覧ください、
「ずいぶんたくさんあるね。それぞれに恨みなく分けあ

「お聞きください」

と紫の上に仰るので、御匣殿で調達したのも、こちらで作ったのも、皆取り出すのであった。

紫の上はこの面の技量は、たいへん勝れていて、色合や艶がすばらしく見事なので、源氏はありがたいお方と思うのであった。

あちらこちらの掃殿から集まった絹織物をご覧になって、濃い紫色などの様々なものを選んで、御衣櫃、衣篋などを用意し、年輩の上席の女房たちが御前で「これはかれは」と取り揃えて入れる。紫の上もそれを見て、「どれも優秀のつけがたいものだが、着る人の容貌を思いつかべて選んでください。着ているものが似合わないのは、みつともないものです」と言くと、源氏も笑って、

「さりげなく、玉鬘の容貌を推し量るおつもりか。さて、どれをご自分にお思いいか」と仰せになると、

「それも鏡だけでは決められません」

と、さすがに恥じらいながら言う。

紅梅の襲で模様が浮いた薄紫の小袿と、鮮やかな紅梅色の袿は紫の上の御料。

桜襲の細長に、艶のあるピンクの袿を添えて、明石の姫君の御料である。

浅い縹色の海賦の織物は、美しい織りだが、派手なところはなく、濃き（麩脂色）の搔練の袿を添えて、夏のお方花散里の御料に。

あざやかな赤い袿と、山吹色の細長は、あの西の対の玉鬘に差し上げるのを、紫の上は見ぬようにして想像する。

「父の内大臣は華やかで美しい方なのだが、優美なところが欠けている点が父に似ている」と紫の上が想像しているのを、顔には出さないが、源氏は見えていて、紫の上のただならぬ関心を感じた。

「いや、この容貌の見立ては、人のご機嫌を損ねてしまう。良しとしても、衣装の色など限りがあり、人の容貌は美人でなくても、格別の深みがあるものです」

と言って、あの末摘花の御料に、柳襲で由緒ある唐草模様を織り込んで、たいへん優美なのを選び、人知れずほほ笑んだ。

梅の折枝に蝶、鳥が飛び交っている唐めいた白い小袿に、濃紺の艶のあるのを重ねて、明石の御方の御料で、たいそう気品のある品に、紫の上は憎らしいとご覧になる。

空蟬の尼君の御料には、青い鈍色の織物でとても気の利いたのを見つけて、黄色い梔子色の袿を添えて、御料とし、同じ日に着るよう文をつけた。本当に似合ったところを見ようとの心づもりだった。

たったこれだけです。ここから玉鬘の衣裳を考証したものを今からご覧いただきます。鮮やかな赤い袿の山吹色の細長と書いてあるだけです。

今、問題になっているのが、これを再現するのに、吉岡更紗さんが植物染料で染めておられているので、黄色

は梔子かなとかと相談しています。でも、この本に載っているようには鮮やかではないんですよ、淡いベージュみたいな色を出すんです。また赤ですと、茜でつくる赤もあるし、紅花で染める赤もあるし蘇芳で染める赤もあるし。源高明(九八三年没)の『西宮記』で、高明さんが紅花を使った赤はダメよ、禁止と言っています。禁止されてから物語ができていられるので、紅花を使ったらダメなのかと思うんですけど、禁止はされても人が死ぬわけではないので、使っていたかもしれないとは思いますが、思います。思いますけれど、紅花というのがタブー視されているものだったということも覚えておいてください。それにしても、なんであかんのでしょうかね。

見はったことありますか？ 例えは江戸時代の装束の生地とかの本が売っていたりするんです、そういうのも見ますし、吉岡さんに染めてもらったものも持っているし、銀座の高田さん、他の人らが染めた生地もあります。色が全部違うんですよ。誰の説を採用しよ

うかなと困ってしまいます。

井筒の仕事では商売人的な発想から、今一番売れている人、支持を集めている人の説に従っておこうとして、選んだのが吉岡先生です。吉岡先生のお話や本に沿って決めています。株式会社井筒のトップとしては、そういうことを決めなあかんのです。あっちの色にしたりこっちの色にしたりすると、社員も迷います。とても難しいことを簡単に割り切ってしまうおとしたときに、間違いが流布してしまいます。商売人も一般の人も分からない事でも、権威を持つて語られたときに、皆が信じてそれが常識になってしまうことは多いと思います。

この間、京都の近代美術館でペルシャの宝物展を見に行ったら、インド茜、蘇芳、ついでに紅花もわかりました。わかった気がしました。でもそれは吉岡更紗さんとは必ずしも意見の一致を見ないんですよ。吉岡さんが昔、染めたのと、今、染めるのはまた違うかもしれないですね。インド、ペルシャで染めたのや、江

戸時代の装束の生地を集めた本を持っているのですが、天皇さんが着ておられる紫の表袴の生地も残っていたりしています。そんなのを総合して、えいやつと私が勝手に思っているのは、紅花で染めた紅花色というのはピンクなんです。どんなピンクかというところは感じのピンク、だから古い言い方ですけれどサイケデリックな色なんです、ハイカラでもっとビビッド。臙脂系の赤をもっと濃くして少しピンク系の赤を入れたようなものが茜。蘇芳で染めても赤い緋色の袴で、言葉としては矛盾していますけれど、緋色は茜染めで染めた色ですが、すでに古代の時点で蘇方を使っていたかもしれないなとも思っています。紅花については源高明が禁止しています。紅花を使ったらいけない、茜を使う。緋袴というのは茜染めだという話が原則論としてはあるんですけど、茜ってなかなか手に入らなかつたりするんですね。思いどおりの色が染められないので、茜を使った体で、おそらく蘇芳に大方代わっているのではないかという気がしています。今も多分、

植物染めと言った時に、一〇分の一とかちよつとだけ植物染料使つて、他は化学染めするみたいなところがあつたように、むかしの人も一〇分の一だけ茜を使つて、他は蘇芳で染めることもやつたかなと、勝手に思つてい

ます。あと、さつきペルシャの話をしました。ペルシャで見た色というのは多分日本にはないんです。あんな色は着ない。僕は好きだから「ええ色やな」と思いますが、一般の人の好みで言うと、ああいうどぎつい系の色ではない、やわらかい色を日本の人は好んだんではないかと。優しい赤にするために梔子の黄色を載せてから蘇芳なり茜を載せたんじゃないかなと思ひます。

いろいろな本を読まれたらいろいろな色が書かれて、紙に印刷されたものを見るのは勘違いの元だと思ひます。昔に染められた衣裳を実際に見に行くのが一番いいと思ひます。世界各地の衣裳で確認するのがいいと思ひます。そんな展覧会に行つて、紅花つてどんな色、茜色つ

てどんな色、蘇芳色つてどんな色と思ひながら見るのがいいと思ひます。なんとなく染めた人々の住む地域の好みとかもわかつてくるような気がします。

どうしましょう、モデルさんにちよつと動いてもらつてみましょうか。さつき言つたように、まず座つてもらいいます？立つのは珍しいんです。これは今正座しておられます。大抵の人は、正座しはるんですよ。この時にこの立膝の格好をしてほしいんです。こういう格好をした時に背中が丸くなるんですね。そのときに腹筋と背筋を使つて背筋を伸ばしてください。足を一回伸ばしましょうか。一回倒れてしまつと裾がゆつたりして動きやすくなります。こういうことが文化です。なかなか現状を変えるのが難しい。一回こうだと思つて違ふことができない。正座をしてしまふ心の慣性の法則みたいなものがあるんですね。この姿のまま立たなくともいい、ずっとこれで二四時間過ごすんですね。そのような時代の格好をしてくださいと言つても、なか

なか心理的にも肉体的にも難しいですよ。

次に、彼女に裳と唐衣の衣裳に変えてもらいます。十二単というのは「本当は十二単でない」と僕は思います。正しい言葉と言うのは一般の人に必要なのだろうか、思ったことがあって、一般の人に対しては十二単と言う言葉で説明することにしましたが、ここでは一歩踏み込んだ話をしていますので、あえて「十二単とは言いません」と申し上げます。十二単と呼んでいるのは女性の盛儀の正装、一番大事な儀式における姿がこれ。裳と唐衣をつけている姿を言います。特に大事なのは裳なんです。だから「イショウ」と書く時に、この「衣裳」という字を使いますけれど、裳が重要な時代は衣と裳、上に着る「衣」と下に着る「裳」を表現する漢字で書くべきだなあと思います。裳の概念がなくなつてからは衣装でいいと思います。

今お召しいただいています衣裳の図案は鶴岡八幡宮

の御神宝を参考にしました。ここにあるのは小葵文様の地紋ですが、これは模様を拙く織っています。それは実物が今の生地から見ると綺麗には織れていない、幾何学的には正確に織れていないからです。拙く織っているのを再現しようと思いましたが。今も手機を使いますし、モーターの力を借りる織機もあります。いずれにしても明治以降、西陣にジャガードが持ち込まれてから、ジャガードを使います。ジャガードで使うということは、型を作るということです。紙で型を作っていた時はとても大層な仕事になりますので最小単位の繰り返しを考えて作ります。今はコンピュータで作りますので1mぐらいの単位で紋型を作り、全部地模様の変化も描いていくということをしました。

この衣裳は織り間違いがあるんです。これは間違えて間違いなく織ったものですね。どこを間違えていたのかと言うと、本当は違う色なのに、同じ色で織っているんです。なんでそんな間違いをしたのかなあと思う

けれど、自分が織ったつもりになって考えると、一生懸命織っていたらそういう間違いもするよなというよな、間違いをしていると思いました。もう一つ思ったのが、そういう間違いをしたものが神に捧げる衣裳として許されるのかという点です。多分、いま私の持つ感性とは異なる感性を当時の人は持つっており、それは織物の模様に関して何という大らかな感性であることかと思いました。

これが「唐衣」これが「裳」。この裳がとても大事です。裳をつけているかいないかで、その人の位が分かる。男の人も裳を着ています。聖徳太子の姿にも裳があります。衣偏に習と書いて「褶ひづみ」と言います。これもプリーツのある裳です。ここら辺が裳です。お坊さんも裾がひらひらしていますよね、あれも大事で、時宗のお坊さんは裳なしの衣を着て、それを自ら阿弥衣と称してアイデンティティーとしていました。裳があるかないかというのは、とても重要なんです。江戸末のお寺の

財政に携わる教団で、高い地位のお坊さんでない方は裳をつけていません。

最後に明石の姫君。これは正装、唐衣、裳と言っている装束ではありません。もうちよつとカジジュアルで、なおかつ若い人用の細長です。この織物がとても素敵なので見てほしいなと思います。白の織物で、とても薄く織っています。裏の赤はこんなんです、触つてもらうのが一番いい理解の方法なんですけど、残念ながら今日は皆さん全員には触っていただけません。

十二単が重いと思われるのは、勘違いの部分があると思います。それは安物を着ているからだと思んです。この様に薄く軽く織った織物で作った十二単を着て欲しいと思います。平安時代の様に軽く織つてみたいなと思います、それが実践女子大学のプロジェクトで実現することになり一緒にやらせてもらうことになり、とても楽しみで嬉しいことです。



今回最初に玉鬘が着ていた、若い人の衣裳である細長を着てもらいました。この赤と、こちらの赤とでは色に違いがあります。吉岡先生の赤はちよつと黄みを帯びている。こっちは青みを帯びている。本当はどちらか正しいかわかりません。でもそういう違いをみつけて楽しんでほしいのかなと思うところです。



さつき申し上げた、時間の経過を色で表す花橘の襲みたいな襲色もあります。これは「桜襲」です。赤い桜なんか無いですよ。花びらは白く、咲いた花の根っこのところは紫色、そういう意味では裏が紫でもいいなど僕は思うんですけれど、散りはじめの頃には少しピンクになりますので、赤が白に透けて裏が赤もありますね。ああいう感じを表している。襲の色目自体が表現される時に、一つの感性だけではない感性でも表現されるのは面白い。

これが「几帳」といっているものです。「朽木文様」といって腐った木みたいな模様になっています。この教室の天井も朽木模様のボードが貼ってあると僕は思います。偶然似ているのか必然なのか、いずれにしても面白いなと思っています。

これも几帳です。例えば西の対がこうあるとしたら、ここに庇があつてここに几帳を置いて仕切られた部屋になり、その一つ一つの部屋が局になります。アメリカ

カのテレビとか映画の中に出てくるオフィスの様子を見ると、ブラインドのあるガラスの窓が全体の部屋に向かっている、部長クラスと思われる人のいる部屋があります。ああいうイメージが局になります。この源氏の邸と謂われる家は、僕らが「ただいま」と帰ってくる家とは異なる、働く場所であつて、オフィスと想っていたら結構です。僕は職住一体となつた商家で育ちましたので、より理解しやすいですが、オフィスを取り仕切る人がいて、取り仕切る人のもとに局、食事の担当、衣裳の担当とか、それはこの人は何が得意だと言うことで与えられた仕事をする場所として、こういう家が使われたということです。

もう一つ豆知識です。対屋と母屋に関して「おもうさま」「おたあさま」と言うのはご存知ですか？おたあさまとはお母さんのこと、あれは対の家に住んでいるから「おたあさま」。母屋に住んでいるお父さんは「おもうさま」です。

話が飛んだところで以上です。今日はありがとうございました。

花橘かさね



1



2



3



4

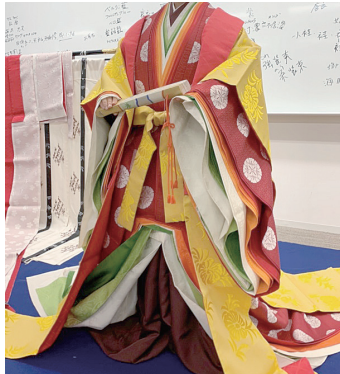


5

特集-4：十二単をお見せします



花橘かさね（十二単）



細長



細長